

令和元年6月24日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02749

研究課題名(和文) 英語と日本語の移動表現の第二言語習得 日・英・中・韓を母語とする学習者を比較して

研究課題名(英文) The acquisition of English and Japanese motion expressions by second language learners with typologically different first languages

研究代表者

稲垣 俊史 (INAGAKI, Shunji)

同志社大学・グローバル地域文化学部・教授

研究者番号：00316019

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：中国語話者、英語話者による日本語の移動表現の習得、日本語話者による英語の移動表現の習得を容認度判断タスクと産出タスクを使って調査し、母語と目標言語における移動事象の語彙化パターンの違いが移動表現の第二言語習得にとどのように影響するかを検証した。その結果、英語話者は日本語型の文を容認したが、日本語では許されない英語型の文も容認した。日本語話者は英語型の文を容認したが、英語ではやや不自然な日本語型の文も同様に容認した。中国語話者は英語型の文を容認せず、日本語型の文を容認した。産出タスクの結果は、概ね容認度判断タスクの結果と同様であったが、日本語話者の英語型の文の産出が少なかった点が異なっていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

(a) これまでの研究で用いた容認度タスクを中国語母語話者を母語とする日本語話者に新たに実施し、移動表現において中間型であるとされる中国語の日本語習得への影響を検証できた点。これにより、英語話者と異なり、中国語話者は肯定証拠がインプット中に存在するL1特性のみを日本語に転移させることが明らかになった。  
(b) 産出タスクを日本人英語学習者に実施することにより、日本語話者は英語型の文を容認できても、産出は困難であることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：This research investigated the acquisition of English and Japanese motion expressions by second language learners with typologically different first languages. In particular, we studied Chinese- and English-speaking learners of Japanese and Japanese-speaking learners of English, using acceptability judgment tasks, and Japanese-speaking learners of English, using a written production task. Results showed the following. (a) It is relatively easy for learners to accept the L2 patterns that are available in the input as positive evidence, whereas it is difficult for learners to eliminate the L1 patterns that are unacceptable in the L2. (b) When the L1 allows both the L2 pattern and the pattern not available in the L2, learners accept only the pattern available in the input (i.e., the L2 pattern), not transferring the L1 pattern. (c) Learners had difficulty producing the L2 pattern, although they accepted the same pattern in the acceptability judgment task.

研究分野：第二言語習得論

キーワード：第二言語習得 移動表現 転移 肯定証拠 否定証拠

## 様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

移動表現の第二言語習得が盛んになってきていたが、以下の問題点があった。

(1) 当時の研究は容認度判断タスクを用いたものが中心であり、他のタスク、特に産出タスクも用いてデータを収集し、学習者の中間言語体系を多角的に探る必要があった。

(2) 移動表現の第二言語習得研究において、学習者の母語と目標言語が異なる場合（例えば L1 英語、L2 日本語）の研究がほとんどであり、L1 と L2 が類似している場合（例えば L1 中国語、L2 日本語）の研究が必要であった。

### 2. 研究の目的

(1) これまでの研究で用いた容認度タスクを中国語を母語とする日本語話者に新たに実施し、移動表現において中間型であるとされる中国語の日本語習得への影響を検証する。

(2) 産出タスクを日本人英語学習者に実施することにより、容認度判断タスクとは別の角度から日本語話者による英語移動表現の習得を検証する。

### 3. 研究の方法

(1) 研究目的(1)に関して、中国語は英語型と日本語型の両方を許し、中間型とも呼べる言語である（丸尾 2005）。Slobin (2004) は、中国語のような言語を“equipollently-framed language”（等価型言語）と呼び、第三の類型として区別すべきであると主張している。本研究では、Inagaki (2004) で英語話者に用いた容認度判断タスクを中国語話者に実施することにより、中国語話者の日本語移動表現の習得を調査した。先行研究における英語話者のデータと比較することにより、中間型である中国語の L2 習得への影響を検証した。

(2) 研究目的(2)に関して、学習者が目標言語の移動表現形式をどのように認識しているかを測る容認度判断タスクに比べ、移動表現形式のアウトプットを求める産出タスクでは母語の影響がより顕著に現れる可能性がある。例えば、ある日本人英語学習者が判断タスクで“John ran into the house”を容認しても、産出タスクにおいてはこのような英語型の表現が使えないかもしれない。本研究では、Harley (1989) が英語話者によるフランス語の移動表現の習得研究用に開発したストーリー・ライティングタスクの英語版を作成し、日本人英語学習者からデータを集める。

### 4. 研究成果

(1) 中国語話者、英語話者による日本語の移動表現（例. ジョンが家に走って入った）の習得、ならびに日本語話者による英語の移動表現（e. g., John ran into the house）の習得を容認度判断タスクと産出タスクを使って調査し、母語と目標言語における移動事象の語彙化パターン（Talmy, 1985）の違いが移動表現の第二言語習得にとどのように影響するかを検証した。

(2) その結果、英語話者は日本語型の文（例. ジョンが家に走って入った）を容認したが、日本語では許されない英語型の文（例. ?\*ジョンが家の中に走った）も容認した。日本語話者は英語型の文（e. g., John ran into the house）を容認したが、英語ではやや不自然な日本語型の文（e. g., ?John went into the house by running）も同様に容認した。中国語話者は英語型の文（例. ?\*ジョンが家の中に走った）を容認せず、日本語型の文（例. ジョンが家に走って入った）を容認した。

(3) 産出タスクの結果は、概ね容認度判断タスクの結果と同様であったが、日本語話者の英語型の文（e. g., John ran into the house）の産出が少なかった点が異なっていた。つまり、認識のレベルでは、日本人英語話者は英語型の文を容認できていたが、産出レベルだと、英語型の文を使うのが困難であり、日本語型の文（e. g., John went into the house/?John went into the house by running）の産出が多かった。

(4) 英語話者の日本語習得の結果から、母語にない L2 特性を中間言語体系に加えるのは、インプット中に肯定証拠が存在するため比較的容易であると考えられる。一方、母語にあり L2 にない特性を中間言語体系から除くのは、肯定証拠だけでは不可能で否定証拠を要するため、困難であると考えられる。ただし、中国語話者の日本語習得の結果から、母語に L2 特性と L2 にない特性が共存している場合、インプット中に肯定証拠のある L2 特性のみを転移させ、インプット中に肯定証拠がない L1 特性は転移させないようである。このため、中国語話者にとって、母語にあり L2 にない特性を中間言語体系から除くのは、英語話者にとってほど困難でないと考えられる。

(5) 日本語話者の英語習得においては、英語型の文を容認できるが、産出が困難であったことから、肯定証拠により L2 特性が認識されるようになっても、それが L2 特性の内在化に至っていない可能性があることが示唆された。これは、移動表現の第二言語習得における L1 の影響の

根深さを示していると言えよう。

<引用文献>

- ① Harley, B. (1989). Transfer in the written compositions of French immersion students. In H. W. Dechert & M. Raupach (Eds.), *Transfer in language production* (pp. 3-19). Norwood, NJ: Ablex.
- ② Inagaki, S. (2004). Motion verbs with goal PPs in English and Japanese as second languages. *The Language Center Journal*, 3, 29-64, Osaka Prefecture University.
- ③ 丸尾 誠 (2005). 『現代中国語の空間移動表現に関する研究』 東京：白帝社.
- ④ Slobin, D. I. (2004). The many ways to search for a frog: Linguistic typology and the expression of motion events. In S. Strömquist & L. Verhoeven (Eds.), *Language in mind: Advances in the study of language and thought* (pp. 57-192). Cambridge, MA: MIT Press.
- ⑤ Talmy, L. (1985). Lexicalization patterns: Semantic structure in lexical forms. In T. Shopen (Ed.), *Language typology and syntactic description*. Vol. 3: Grammatical categories and the lexicon (pp. 57-149). New York: Cambridge University Press.

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 3 件)

- ① 稲垣俊史 (2017). 「L1 習得と L2 習得の類似点と相違点—可算・不可算の区別に焦点を当てて—」『ことばの科学研究』第 18 号, pp. 8-19. 査読あり
- ② 薛惠善・稲垣俊史 (2016). 「韓国人日本語学習者における L1 多義動詞「열다」「보다」の転移可能性——L1 典型度、L2 における L1 用法の有無、習熟度の影響——」『日本學報』(韓国日本學會編) 第 106 輯, pp. 115-127. 査読あり
- ③ 稲垣俊史 (2015). 「中国語話者による日本語のテンス・アスペクトの習得——崔 (2009) の再解釈——」『中国語話者のための日本語教育研究』(中国語話者のための日本語教育研究会) 第 6 号, pp. 50-60. 査読あり

[学会発表] (計 6 件)

- ① 稲垣俊史 L2 習得と L1 習得の類似点と相違点, ことばの科学会オープンフォーラム 2016 (第 8 回年次大会), 2016 年 10 月 9 日, 関西学院大学梅田キャンパス.
- ② Inagaki, S., Iori, I., Hasuike, I., Seol, H., & Fukuta, J. The Acquisition of Japanese Grammar by Chinese and Korean Speakers, The Pacific Second Language Research Forum (PacSLRF) September 10, 2016, Chuo University, Japan.
- ③ 稲垣俊史 「どうすればできるようになるか」から考える, 『言語の理解と産出チーム』公開研究会, 2016 年 3 月 6 日, 中央大学後樂園キャンパス.
- ④ 稲垣俊史 英語母語話者, 日本語母語話者, 日本人英語学習者による名詞の可算性の認識, 「英語学セミナー」特別公開講義, 2015 年 9 月 29 日, 甲南大学.
- ⑤ 稲垣俊史 「どうすれば英語ができるようになるか」から考える英語授業, KSU 英語教育研究会・京都産業大学外国語学部英語学科共催平成 27 年度研究大会, 2015 年 9 月 27 日, 京都産業大学.
- ⑥ メンコンケア・稲垣俊史 ニ格名詞句との共起可能性から見たクメール語話者による日本語の授受表現の習得, 日本第二言語習得学会 (J-SLA2015), 2015 年 6 月 7 日, 広島大学.

[図書] (計 2 件)

- ① 稲垣俊史 (2018). 白畑知彦・須田孝司 (編), 稲垣俊史・梅田真理・宮本エシジソン正・吉田絢奈・穂苅友洋・田村知子・白畑知彦・若林茂則・木村崇是 (著) 『第二言語習得研究 モノグラフシリーズ 2』 第 1 章「日本語話者による英語の可算・不可算の区別の習得」pp. 1-22, くろしお出版, 208.
- ② 稲垣スーチン・稲垣俊史 (2017). 『日本の大学英語教育における多読の効果』 一粒書房, 64.

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19（共通）

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：稲垣 スーチン

ローマ字氏名：INAGAKI Shuchun

所属研究機関名：大阪府立大学

部局名：高等教育推進機構

職名：准教授

研究者番号（8桁）：50405354

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。